
共同研究の経緯と成果

岩淵令治

1. 研究の目的

本書は、2010年度より2012年度まで、国立歴史民俗博物館の基幹共同研究「民俗表象の形成に関する総合的研究」の3つのブランチの1つとして実施した広領域歴史創成研究「歴史表象の形成と消費文化」の成果報告書である。その研究目的は、近代以降の商品開発にかかる伝統の創出と礼賛を明らかにすることにあった。

近代以降における大衆向け商品の開発には、流行の創出が不可欠であるが、その中で伝統的なものに新たな価値を見だし、過去の素材を利用する手法がある。その過程では、しばしば歴史学や民俗学、美術史学などの研究成果が取り込まれてきた。

例えば、「江戸」の表象は、近代化論における積極的な江戸時代の評価 [スーザン・ハンレー『江戸時代の遺産』中央公論社、1990年ほか]、バブル期の江戸東京学ブームから、近年の「江戸しぐさ」、江戸検定や日本橋地域などの都心部再開発における資源として様々に利用されている。また、博覧会や物産展は各地の名産品を生み出す場となっているが、それは歴史や民俗の理想型を示すことにもつながっている。あるいは、入学式と節句を典型として、家族の必需品と考えられているものが、実は企業によるマーケティング活動から生み出された新しい「伝統」であることが少なくない。そこで、本共同研究では、近代以降の商品開発にかかる伝統の創出と礼賛を、とくに学問との関わりから分析した。

研究対象としては、まず江戸の表象をとりあげた。「発見」される「伝統」の多くは、「基層文化」としての原始・古代と、「都市文化」としての「江戸」であろう。とくに「江戸」は、明るい庶民とその文化の誕生（鎖国→いわば第2の「国風文化」）の表象として頻繁にとりあげられてきた。しかし、こうした研究は、近代化論における江戸時代賛美への批判が若干みられるものの [市川訓敏「『江戸時代と近代化』をめぐる」『人権問題研究室紀要』14, 1987年]、本格的に取り組まれてはいない。したがって、その一つ一つを時代背景と合わせて丹念にみていくことが不可欠である。そこで、「江戸」表象の原点として、大正期の「江戸趣味」の誕生とその大衆化に着目し、三越百貨店における「流行」の発明の過程とその方法を検討した。三越は、日清・日露戦後に「元禄模様」の流行を生み出し、さらに「伝統」的な要素もとりいれながら子供の「玩具」を商品化する。これを支えたのが、三越が「学俗協同」とうたう研究者・文学者・ジャーナリスト等からなる「流行研究会」の活動であった。そこで、都市史・美術史・経済史・民俗学・人類学・音楽史等から、当時の学問状況にてらしながら流行研究会の活動を多角的に検討することにより、①三越の商品化の過程でどのような「江

戸」が発見されたのか、②そこに学問がどのようにかかわったのか、という点を明らかにした。

さらに、③このような伝統を模した大衆文化の受容と展開が地方にもたらした影響について、産業史や家族史との関わりから検討した。例えば、名産品の創出は消費文化を変化させ、そのために産地間の競争関係をも変えてきた。また、年中行事や人生儀礼は、ある特定の階層や地域に限られていたものが商品化によって全国に展開し、「伝統」として各家庭に浸透していった。その背景としては、全国的に画一化された理想的な家族像が創出されてきたことがある。これらのような消費文化や儀礼文化、家族生活と商品化との関わりについては、日常にあふれていることであるが、これまであまり研究の対象になってこなかった。そこで、大衆文化の受容と展開については、地方での現地調査をもとに、現代を含めた実態の解明に取り組んだ。

2 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

所属は2013年3月時点のもの(ゲストスピーカーは報告時のもの)である。

館外

青木 俊也 松戸市立博物館・学芸員
神野 由紀 関東学院大学・人間環境学部・教授
瀬崎 圭二 広島大学大学院・文学研究科・准教授
田中 和仁 田中本家博物館・主任学芸員
玉蟲 敏子 武蔵野美術大学・造形学部・教授
谷川 章雄 早稲田大学・人間科学学術院・教授
長沢 利明 東京理科大学・非常勤講師
濱田 琢司 南山大学・人文学部・准教授
藤岡 里圭 関西大学・商学部・教授
丸山 伸彦 武蔵大学・人文学部・教授
満菌 勇 日本学術振興会・特別研究員

館内

青木 隆浩 本館・研究部・准教授
◎岩淵 令治 本館・研究部・准教授
内田 順子 本館・研究部・准教授
久留島 浩 本館・研究部・教授
小池 淳一 本館・研究部・教授
常光 徹 本館・研究部・教授
原山 浩介 本館・研究部・准教授
○山田 慎也 本館・研究部・准教授

〔リサーチ・アシスタント〕(2012～13年度)

横山考之輔 立正大学・大学院生

[ゲストスピーカー]

金子 淳 静岡大学・生涯学習教育研究センター・准教授
滝口正哉 千代田区立四番町歴史民俗資料館・学芸員
井田太郎 国文学研究資料館・助教
本康宏史 石川県立歴史博物館・学芸課長
表 真美 京都女子大学・発達教育学部・教授
古賀令子 文化学園大学・特任教授
鈴木希帆 東京国立博物館・アソシエイトフェロー

[研究協力者]

秋元勝喜, 飯田希美, 大関真由美, 金子俊太郎, 栗原祐斗, 黒沼梢, 後藤恵菜, 笹川知樹, 高見沢美紀, 高屋麻里子, 廣田華子, 松本麻衣子, 水品洋介, 堀野周平

3 研究経過

研究会は3年間で計12回開催した。このほか、歴博フォーラムも開催した。また、並行して田中本家博物館の資料調査を実施した。

【研究会】

2010年度

◇第1回研究会 2010年6月19～20日 国立歴史民俗博物館

岩淵令治 主旨説明

山田慎也 第4展示室リニューアル計画について

(参加者全員) 各共同研究員の研究紹介

神野由紀「初期百貨店における趣味と消費－三越百貨店の文化活動を中心に－」

◇第2回研究会 2010年8月16日 国立歴史民俗博物館

原山浩介 第6展示室現代展示(展示説明)

青木俊也「戦後生活再現展示の動向における現代史展示「日本住宅公団団地実物大再現」

金子淳(ゲストスピーカー 静岡大学)「博物館における昭和三〇年代表象」

青木隆浩「第4展示室「家族の変容」(展示案説明)

◇第3回研究会 2010年12月18日 国立歴史民俗博物館

久留島浩・岩淵令治 企画展示「武士とはなにか」(展示説明)

岩淵令治「旧幕臣戸川残花と元禄研究会」

滝口正哉(ゲストスピーカー 千代田区立四番町歴史民俗資料館)「南北会の運営と活動について」

◇第4回研究会 2011年3月5～6日 益子参考館ほか

結城紬関係(結城市伝統工芸館, つむぎの館), 益子焼関係(窯元つかもと, 益子参考館, 益子の陶器市)の見学

濱田琢司「『民芸』思想の発生と, 普及における『消費の場』の役割」

◇第5回研究会 2011年7月9日 国立歴史民俗博物館

瀬崎圭二「流行研究会の文人たち」

井田太郎(ゲストスピーカー 国文学研究資料館)「稀書複製会叢書と文学研究」

◇第6回研究会 2011年8月21日 アド・ミュージアムほか

『WOMEN on the TOWN—三越とパルコ, 花開く消費文化』(アド・ミュージアム)・「濱田庄司スタイル展」(パナソニック電工汐留ミュージアム)の見学

◇第7回研究会 2011年11月19日・20日 石川四高記念文化交流館ほか

本康宏史(ゲストスピーカー 石川県立歴史博物館)「兼六園ブランドの創出—都市公園と消費文化」

丸山伸彦「幻の加賀友禅」

金沢関連施設見学(石川県立歴史博物館, 兼六園, 加賀友禅伝統産業会館)

◇第8回研究会 2012年3月3日～4日 国立歴史民俗博物館

青木隆浩「民俗展示の新構築の報告関連部分の概要」

表真美(ゲストスピーカー 京都女子大学)「食と家族—家族団らんの歴史の変遷—」

長沢利明「江戸東京の雛祭り」と田中本家の雛人形」

山田慎也「民俗展示「行事食の変化」の展示」

古賀令子(ゲストスピーカー 文化学園大学)「かわいいファッションとカルチャー」

岩淵令治「本年度の研究の経過と来年度以降の研究計画」

◇第9回研究会 2012年6月24日 国立歴史民俗博物館

第85回歴博フォーラムの準備報告(岩淵令治・神野由紀・満園勇・瀬崎圭二・玉蟲敏子)

谷川章雄「坪井正五郎と明治時代の考古学」

鈴木希帆(ゲストスピーカー 東京国立博物館)「集古会周辺における縄文受容」

◇第10回研究会 2012年8月29日～31日 旧上高井郡役所ほか

小布施にて高井鴻山記念館, 須坂の旧市街(ふれあい館まゆぐら<明治期の製糸業関連の建物>・大壁造りの町並・笠鉦会館・芝宮・旧越家住宅<山丸一番館>ほか), 長野市善光寺近辺の関連地域(田中本家の呉服等購入先)を見学。

岩淵令治「共同研究の主旨と調査の経緯」

岩淵令治「田中本家と江戸」

神野由紀「田中本家博物館の子ども用品に見る近代初期の消費文化」

満園 勇「大正期における田中本家の消費生活と通信販売」

研究会は旧上高井郡役所にて半公開の形で実施した。

◇第11回研究会 2012年9月15日

第85回歴博フォーラムの最終打合せ、および終了後、意見交換。

◇第12回研究会 2013年3月21日・22日

リニューアル・オープン後の第4展示室の見学

研究報告執筆原稿の概要報告（参加者全員）

【資料調査（田中本家博物館）】

◇予備調査 2010年6月28日

資料目録の収集、調査方法についての相談

◇第1回調査 2010年12月11日～13日

・服飾関係史料の調査・撮影

・近代の家族写真の調査・スキャン

・文書調査 整理分の関係資料の撮影・未整理の書簡の概況調査

◇第2回調査 2011年1月29日～31日

・大正期の雛人形調査

・文書調査 未整理の書簡の整理

・写真カードの一部撮影

◇第3回調査 2011年5月28日～30日

・近代文書、写真付台帳の撮影

◇第4回調査 2011年12月28日～29日

・近代文書、「大正らいふ」展の出品史料の調査・撮影

◇第5回調査 2012年1月22日～23日

・近代文書、雛人形（明治期）の調査・撮影

◇第6回調査 2012年6月2日・3日

・近代文書、雛人形（明治期）の調査・撮影

・併せて須坂市史編さん室・須坂市立博物館においても文書調査を実施

◇第7回調査 2013年1月26日

・江戸時代と昭和の雛人形の調査

このほか、2013年3月25日に三越資料室で資料調査を、また2013年10月～2014年1月に各自が論文執筆のため、都内ほか各地で調査を実施した。

【第85回歴博フォーラム】 2012年9月15日（タイトルは報告時のもの）

「江戸」の発見と商品化－大正期の三越の流行創出と受容」（於国立歴史民俗博物館講堂）

神野由紀「消費社会黎明期における百貨店の役割－三越の商品開発と流行の近代化－」

満蘭勇 「三越による通信販売と地方資産家の流行受容」

藤岡圭圭「大正期における百貨店の量的および質的發展」(コメント1)

瀬崎圭二「三越の流行創出と近代文学」

玉蟲敏子「三越における光琳戦略の意味－美術史の文脈から－」

濱田琢司「百貨店における展覧活動と啓蒙活動－民芸運動を中心に－」(コメント2)

4 研究成果の概要

本研究では、近代以降における大衆向け商品の開発の中で、伝統的なものに新たな価値を見いだし、過去の素材を利用する手法に注目した。そして、①大正期の三越百貨店をはじめとした百貨店における「流行」創出に注目し、「伝統」をもとりこんだ「風流趣味」「江戸趣味」などについて、その発明と大衆化の過程・方法を検討した。また、②こうした三越百貨店の「流行」の発信のみならず、その受容と展開について、地方資産家の消費構造や儀礼における展開を検討した。③さらに、大正期の三越百貨店の商品開発にとどまらず、こうした伝統を模して開発された商品が大衆文化として受容・展開していく様相を、生産地の変容、儀礼における展開など、産業史や家族史との関わりから現代も含めて検討した。

まず①については、独自のブランド化・セット販売・消費イベントの利用といった三越の販売戦略について、婚礼調度の販売戦略(本書藤岡論文)、万年筆の商品開発(本書小池論文)、パイプオルガン演奏の導入(本書内田論文)、を検討した。その上で、個人や集団と百貨店の商品開発とのかわりについて、こども用品の開発へかかわった江戸期の文人的なサークル(大供会 本書神野論文)、旧幕臣(戸川残花 本書岩淵論文)、文学者(フォーラム瀬崎報告、本書瀬崎論文)、黎明期の考古学者坪井正五郎、西欧人の評価および日本「美術」成立と三越の光琳戦略(フォーラム玉蟲報告)等について、その人物や集団の評価や、さらに商品化の過程での展開・変容を視野に入れて検討した。また、その背景として、「趣味の欠如感」を抱く地方流入者による「伝統」や「よき趣味」の受容(本書神野論文)、旧町奉行与力・同心による幕臣の歴史の発見、縄文のデザイン化や、稀書複製会の活動による近世文学の発見、近代・現代家族像の創出(「家族団らん」)があったことが、共同研究員やゲストスピーカーの報告によって明らかとなった。さまざまな専門分野のメンバーによって、三越をはじめとする百貨店の商品開発と社会の関係をより詳細に明らかにすることができたといえよう。さらに、地域における伝統の商品化の展開については、金沢における友禅の展開についても検討した。

②については、地方資産家である長野県須坂市の田中本家を検討し、地元の須崎市／長野市／東京(とくに三越)と、用途に応じて衣服の購入先を変えていたこと、主に通信販売による東京の百貨店からの購入では、百貨店側に購入品の選択をある程度任せる形態(代理選択)がとられ、また一方で商品の納品の際にトラブルが発生していたことが明らかとなった(フォーラム満蘭報告、本書満蘭論文)。また、雛人形を素材に、百貨店からの購入状況や使われ方の一端をうかがい知ることができた(本書長沢論文)。地方における百貨店の商品の受容については、とくに従来未検討な点であり、地方資産家である長野県須坂市の田中本家に焦点をあてることによって、具体的な状況を明

らかにすることができたといえよう。

③では、まず産業史とのかかわりから、生産地の変容について民陶をとりあげた。特定の作家や評論家が、工芸に対する民芸という新たなジャンルを創出して、手作りをもとに産地らしさ、伝統らしさを形成し、陶業の産地である益子においては職人の「個人化」と個人作家の流入という変容がもたらされたことを示した。また、百貨店における展覧会と販売を通して、こうした民陶が付加価値を獲得し、文化的消費の対象となっていく様相を明らかにした（フォーラム濱田報告、本書濱田論文）。さらに、もともと日本の伝統的な化粧法を批判し、輸入化粧品と欧米風の化粧法を強く勧めていた百貨店の中に、明治末期頃から国内化粧品メーカーが入り込むことによって、国産品のブランド化を実現し、1950年代まで伝統美に重点を置いた化粧法が続いていったことを明らかにした。その後、1960年代に欧米風の化粧法が普及していくと、年齢別や性別を意識した「個性化」が化粧品の中に取り込まれ、新たな流行を形成するようになっていった（本書青木論文）。

次に、家族史とのかかわりについては、a百貨店の子ども用品開発による儀礼の普及、bおせちの商品化と変容などを検討した。aでは、百貨店が各地の郷土玩具を参考にしながら子どもらしさを創出して子ども用品をセット販売することで、一般には伝統的と思われる節句（雛人形）や七五三の普及に強く関わったことを明らかにした（フォーラム神野報告）。bでは、近代の西洋料理の受容によって日本料理というジャンルが現れ、プロの技術が家庭料理だったおせちに導入されてメニューが豪華となったことで、家庭で作る負担を軽減するために新たな品目が既製品として販売されて重箱に詰められるようになり、さらに百貨店が重箱詰のおせちのセットを販売する、といった商品化の進展により、伝統的と思われるおせちが家庭の中で大きく変化してきたことを明らかにし（後掲第4展示室）、さらに婦人雑誌の記事からその様相を検討した（本書山田論文）。明治末期から大正期にかけて、デパートが提示したあらたな生活様式が、当時形成されつつあった新中間層の生活に取り入れられ、さらに戦後の家族の生活モデルとしても大衆化していったといえよう。

このほか、伝統の発見という視点と関連して、昔話といういわば伝統の「語り」の調査を産業技術史的側面からとりあげ、録音機の導入によって、筆記による記録から叙述が質的に変わることが指摘された（本書常光論文）。

以上の成果については、すでに本書以外でも、さまざまな機会において公表してきた。まず、2013年3月にリニューアル・オープンした第4展示室（民俗）の常設（総合）展示において、「壺屋焼」と「益子焼」にみる伝統を模した新たな商品（民芸）の出現による産地の変容（「近代化の中の職人」）、正月のおせち料理や鏡餅の商品化に伴う変容（「行事食の変化」）、商業主義や情報化の家族生活への浸透にともなって身体にかかわる商品が性別・年齢別・機能別に細分化をとげ、一方で人々の衛生観や美意識を大きく変えてきたこと（「現代の家族像」）を示した。さらに、第4室特集展示「さまざまな節供」（2013年11月～2014年5月）では、節句行事の歴史の中でデパートの商品化、近年の観光化なども扱った。なお、展示の作成にあたっては、現代展示における表象、とくに過去の賛美という問題について、団地展示や昭和ノスタルジー展示についての検討も行っている。

さらに、成果の一部については、総合誌『歴博』173号特集「共同研究 歴史表象の形成と消費文化」（2012年）、第85回歴博フォーラムおよびフォーラム報告書〔岩淵令治+国立歴史民俗博物館「江戸」の発見と商品化－大正期における三越の流行創出と消費文化〕岩田書店、2014年〕の刊行を通して、

広く一般に公表してきた。また、研究対象地である須坂市、金沢市、益子町において研究会を開催し、地域に成果を還元するとともに、地域の研究者と交流することができた。

本共同研究の大きな特徴として、本書のみならず、さまざまな形で研究成果を公表しえた点をあげておきたい。

最後に、本共同研究をすすめるにあたっては、調査させて頂いた諸機関、とくに田中本家博物館と三越資料室にはたいへんお世話になった。ここに感謝の意を示したい。

(学習院女子大学国際文化交流学部、国立歴史民俗博物館客員教員)